

ずいそう

戸惑いのなかから



高野 雅子

この春、三年間勤めた比曽の地をあとにして本校に転任して来たが、今までに少人数の学校に慣れてきた私にとって里の学校は大きく感じられなるとなく不安が先に立つ心境であった。担任は五年生で三十八名。明るく元気のような子供たちとの出会いに不安も消しとんで「私もがんばらなければ」と決意も新たにスタートしたのだったが、日がたつにつれ、朝、教室への足どりが重くなりはじめた。それは教師の意図する高学年の姿とはほど遠く、中学年気分の抜けきれないにぎやかな子供たちに「静かにしなさい。」「五年生にもなつてなんですか。」と叱り言葉を連発する毎日に、自分ながらいや気がさしてきたからである。

昨年度はわずか十名の二年生を担任していたとはいえ、長い教職経験を持ちながら三十八名の学級をまとめることのできない自分が無性に腹立たしく情なく、そしてあせりが先に立った。「何に原因があるのか。」と戸惑う心をしずめ、じつと冷静に自分を見つめるとき、私の心を去来するなにもものがあつた。「叱るだけでは、心のふれ合いは生まれぬ。」と。学級づくりは一朝一夕にできるものではなく誠意さえあれば必ず時が解決するのだからあせつてはいけぬ。それよりもまず子供との対話が必要なのだ気づいたのである。



活発に意見をのべ合うグループ学習

そこで、まだ自己本位の気分が残る子供たちに「人の立場を考えるやさしい心」「なんでも話し合える教室」という目あてを持たせ、グループ作りに取りかかった。更に連帯感を養うためにグループ日誌も取り入れることにした。

「なんでも話そう日記」と銘うって。それからは机上に届けられるノートにひまをみて少しでも詳しく返事を書きグループに返してやる。赤ペンの字を食い入るように見つめる子供、パンザイをして手をたたく子供たち。その反応が思ったより大きく、こうしたやり取りのなかに子供との対話の糸口をつかめた思いがしてうれしかった。ほほえましいこと。考えさせたいこと。ぜひ紹介したいことなど、のがさず帰りの会に取り上げて賞揚してやり、賞状もグループごとと与えてやることにしていた。

「一人はみんなのために、みんなは一人のために」の合い言葉で。それから少しずつではあるが子供たちの態度に変容が表れてきた。掃除をまじめにやれなかつたT君、S君が注意されなくなつた。わずか五名の班員で教室清掃を時間内にきちんと仕上げなど、それは何日か前まで考えられなかつた姿であつた。

「今日の五時間目、先生が出張でいなくなつたけれどもよかつたですよ。教頭先生がみえたとき、みんながあまり静かに勉強していたので、『五年生、あんまり静かなのでどこかに行つてしまつたのかと思つた。』とほめられました。」

「私たちのグループは、みんなとてもよく働くんですよ。(中略)でも言葉づかひがよくありません。それで言葉づかひに気をつけようつてみんな約束しました。先生みててください。」

グループ日記を始めてから一か月余り、こんな語りかけがみられ、ときには「どう思いますか。」「こんなことどうですか。」と問いかけや意見を述べてくれるようにもなつた。

五年生の発足からまだ日が浅く、これから努力しなければならぬことが数多い現在であるが、この問いかけに答え、意見を尊重し、子供とともに考えてよく努力している昨今である。

「教師は子供を選ぶことができる。子供は教師を選ぶことができない。」そのために担任しているこの子らの成長を信じながら、心のふれ合いをたいせつにしていきたいと思います。

(浪江町立大堀小学校教諭)